日本クリスチャン・アシュラム連盟

祈禱生活

Japan United Christian Ashrams.

発行所
東京都中野区
江原町3-19-12
江古田教会気付

編集人
海老沢　宣　道

発行人
高　瀬　恒　徳

定価1部　30円

明　渡　し
静　聴
霊　交
献　身
奉　仕

スタンレー・ジョーンズ博士と
偉大なるその教訓

高　瀬　恒　徳

㈠

神の賜物は教うるに暇がない。しかし、その最大なるものの一つは活ける人格による霊的感動であろう。そして最近における偉大な賜物を代表する者はスタンレー博士その人であろう。

彼の遺した偉大な業蹟の一つはその熾烈な伝道の生涯である。十七歳にして改心、アズベリー大学で神学を修め、二十三歳で「印度へ行け」との召命に接し、宣教師として赴任。その「ボイラーが破裂するまで」頑張り通した。痛快な一事は全米メソジスト年会が彼を監督に指名したのに対し、教会行政などより一宣教師として働かしてくれ、と栄冠を一蹴したことである。

彼が最後に渡日した際も『物質は豊富だ。しかしいかんせん、霊的真空を』と慨嘆した。日本伝道の責任は我らにある。彼は今もそれを訴えている。

㈡

第二に遺された教訓はその著二十八冊のうちにある。最早、彼の話を聴くことはできない。しかし邦訳されたものが既に十数冊もある。「印度途上の基督」「あらゆる道のキリスト」「山上の基督」「人間苦とキリスト」「マハトマ・ガンヂー」（以上金井為一郎訳）「豊かな生活」（橋本、友井訳）「日々の勝利」（上・下）「力と落つきへの道」（安村三郎訳）

尚、一昨年、日本で講演した『不動の国と不変の人格』また病床で口述した最後の著、"Divine yes" 『神の然り』がある。先ずそのうちの一つを邦訳して出版することになっている。彼の円熟した霊的声咳に接する近路であろう。ぜひ、その一本を購読して欲しい。

これらの著作は、おのおのにその特徴があって、あるものは信仰的生活の徹底、神への服従と信頼、そして勝利を主題として、また家庭生活の平安、愛と信仰による歓喜、そして感謝に満ちた秘義を説くもの、あるいは心理学的、社会学的に人間生活の苦悩を克服する福音を、提唱している。何れも推薦のできる好著である。

㈢

最後は「あとを頼む」と特に小生に言って行かれた。日本アッシュラムについてである。アッシュラムは印度語で「ア」は離れる。「シュラム」は職業、もしくは仕事を意味する。仕事を離れるとは怠けることや、職場放棄ではない。

まず、私たちの生活との関係を考えて見たい。職業に熱心なことは良い。しかし、往々にしてその職業が私たちを悪魔の虜にしておりはしないか。儲け主義、我利我利盲者、我執、無信、独善の奴れいとなっている。日本人は働きす

ぎると言われる。働きすぎるのではない。職業の奴れいにされてしまっている。アッシュラムはその職業を離れて神に行くのである。神に聴き、自己を反省し、神に自己を開け渡して、神に満たされ、能力に溢れるのである。

また同時に自己中心の孤独、独善から救われて神にあって親しき人間性を回復し、まことのコイノニヤの幸わいを見出す。それがアッシュラムなのである。

現在の教会に欠けているのは主にある霊の交わり（コイノニヤ）である。スタンレーはこう言っている。『古今のグループ活動はコイノニヤを教会に取戻す試みであって、アッシュラムはその一つである。我らはアッシュラムこそその道であるとか、最善の道であるとは言わない。これは最善の道への道であるとだけ言っておく』と。また言う『コイノニヤがあるところに教会があるのであって、交りのないところには、組織はあっても教会はない』と。

アッシュラムは教会ではない。教会に奉仕する僕、伝道のために教会を助けるものである。

これはスタンレー・ショーンズ博士の提唱したもので、日本アッシュラム連盟は、北海道、東北、関東、名古屋、京阪、中国、四国、九州の八地区の連帯から成り、世界アッシュラムの一環である。願うは、全教会に奉仕し、その徳を樹てうるものとならんことである。

追悼　ジョーンズ博士の生涯

海老沢宣道

去る一月二十五日午後十時、博士は生涯の大半を捧げて奉仕された愛するインドの地から天国へ凱旋された。師の指導を受けた全世界のアシュラムの同志は、心からこの今世紀最大の霊的指導者の霊に感謝を捧げていることと思う。

師はメリランド州の片田舎に生れ十七才の頃、メソヂスト記念教会で伝道説教を聞いて献身し、アズベリー大学で神学を修め、二十三才の時、『インドに渡って迷える民を導け』との御声を聴き、宣教師として一生を外国伝道に献げた。

祈りの人

師は常に主の御声に従って行動をした。宣教師となったのもそうだが、インド伝道の初期には思うような実を結ぶことなく遂にノイローゼになり医師からは帰米することを勧告された時、ある夜、身の振り方を主に尋ねると、『お前は私に従ってここまできてくれた。然し一切を私に委ねていない。お前がまだ捧げていないものがある』という御声があった。そこで師は、自我の一切を主に明け渡した。その時、病気は直ちに医やされ引続いて働くことができたばかりか、福音を信じ、主を受入れる者が続々と起ってきたという。

師は毎朝四時にひとり神と対座された。ベッドから降りて聖書を開き、その日の御言を頂いて祈る姿の崇高さに、伝道旅行を共にした阿部義宗氏は心を打たれた。師の霊力はこの朝の一時に与えられるという秘訣が判ったと語っている。

平和の人

師は平和ならしめるために祈りと実践に励んだ。第二次大戦の遙か以前から日本の人口問題が戦争原因の一つになることを予見し、その解決策を計り、いよいよ風雲急になると、インド行の予定を中止して、米国に留まり、日本の賀川と呼応して両国内に祈禱運動を進めると共に時の大統領に天皇あての親電を打たせたことは、かくれもない事実である。

常に各国の指導的政治家への伝道に努め、また労資の間に立って和解の務めを尽し、愛の福音をもって人種階級の差別撤底に骨を折った。ガンジーの親友となり、ルサー・キング牧師に影響を与えたと言われ、ノーベル平和賞の候補に上ったこともあるほどの平和の使徒であった。

伝道の人

師は『世界はわが教区なり』というウエスレーの言葉を文字通り実行した。四十数年前、全米メソジスト教会の年会は一回の投票で彼を監督に選んだが、一日の猶余を願い祈って翌日、満場拍手の中に立ち、『感謝に耐えないが、私は教会行政よりも宣教師としてインドに送り出してほしい』と辞退の挨拶をした時、満場は静まり、やがて感涙にむせぶ声が起ったという。八十九才の最後まで一個の大きなスーツケースを携えて、全世界を伝道して歩く姿は敬服の他なく、枕する所なき主イエスの御足の跡を行く、現代のパウロと称しても過言ではあるまい。

インドは勿論のこと、毎年何か月かを米国その他の国々に伝道の歩みを進められたが、戦後はいち早く荒れ果てた日本を訪れ、全国数十の市町村を巡回して下さった。二、三年おきに以後十回に及ぶ日本伝道は、師がいかに日本人を愛し、日本の救を祈っておられたかの証ではないか。海外から多くの名士が来るが、大低は大都市で講演会を開いて去るだけである。ジョーンズ

アシュラムの五大原則
（一）　キリストへの明渡し
（二）　御言への静聴と立証

師のように全国を巡回されると、聴衆の数だけでも前者が数千、師の場合は数万と一ケタ多くなる。師のような伝道旅行をして下さる人は、今までになかったし、恐らく今後もないであろう。

訪伝の推進者

日本は戦後あらゆる面で急速な発展をしたが、教会は例外であった。初代教会の発展は信徒伝道によったことから、第二回来日の際に訪問伝道の指導者マコンネル博士を同伴され、各地に講習会を開き、献身者を起された結果、教会は生気を取戻し、救霊のわざが力強く進められ、全国連合会の組織も、でき、ます〳〵協力の実を挙げている。

アシュラムの創始者

師は大衆に福音を伝えるだけでなく、その実を結ぶように祈って、聖書と祈りに徹する生活運動をインドの訓練方式からヒントを得て、英国婦人宣教師、インド人牧師と三名で守り始めた。初めは師自身のためと考えていたが、参加希望者がふえて、遂にヒマラヤ山の奥地サト・タルに常設することになり、やがて欧米に日本に（第四回来日の際）開催され、世界的運動となったもので、『イエスは主なり』の信仰を徹底的に実験するため、一切の明渡し、聖言への静聴、聖霊の導き、聖徒の交わり、神の国の体験の五項目を身につけた信者となるのが目的である。

日本各地でもこの祈禱生活アシュラムに賛同する人が増加し、全国の八地区に委員会を組織し、昨年はその日本連盟が結成されるまでになった。

大衆伝道とアシュラムと訪伝との三種の活動を指導されたことも師の特色と言うことができよう。

著作の人

七十年にわたる伝道のかたわら、師は二十八冊の名著を出版された。一九二五年に書いた『インド途上のキリスト』は百万部以上、『豊かな生活』も今年で百万部に達し、その他のものを合せると三百五十万部を越えるとアビンドン社は報じている。昨年は『不動の御国と不変の人格』を、今秋にはボストンの病床で筆記させた最後の書『ディバイン・イエス』（神の然り）が出版される。以上は英語版の部数で、その他の外国語版を総計すれば優に一千万部に達するであろう。日本語になっているものも十数点に及んでいる。

長く米国の一流新聞や雑誌の宗教欄を担当し、ラジオを通じても説教をされ、全米に聴衆を持っておられた。

敢闘の人

師は十回目の全日本伝道の前に軽い脳溢血の発病をしておられたが、それを誰にも知られたくなかった。『この年になっても一日に三回の集会はできる。昨年は一日に数回も話したことがある』から、各種の集会を計画するようにと言って来られ、お言葉に従って二ケ月間に数十の町々を廻り、百数十回の講演を願う日程を作ったが、帰米されて一週間後、オクラホマでアシュラムの間に第二回の発病で倒れられたとの報に接し全く呆然自失した。『きつい日程で御無理では』と申上げたが『いや私のボイラーが破裂するまで進むのだ』と言っておられたことが事実となったかと悲嘆に暮れた。全世界の友の祈りは聞かれて、言語の障害、左半身の不随も数ケ月の療養でやや回復に向われ、車椅子で昨年五月には再びインドに赴き、六月には聖地エルサレムで第一回世界大会を開催三二五名を前に不自由な身ながら『私は今生涯の中で最も幸福な時にある。しかし今や一つの時期をおえて、アシュラムの運動をあなた方に委ねる時がきた。あなた方の他にはよりよい適任者を知らない。どうか共に召された目的を忘れず、キリスト中心、教会中心に前進して頂きたい。主は生き給う。イエスは主なり』と挨拶をされた。

大会の後、再びインドに戻り、療養されつ、諸集会を指導されていたが、十二月初めからある集会を断わり、寒いヒマラヤ山中のサト・タルへ赴かれ、ひとり神との深い交わりに入っておられた。何を祈っておられたのであろうか。『最後に医師の取扱いを受ける前に主の御取扱いを受けようと思う』と書いて来られた。そして年末にはバレイリーのアシュラムに出席されたが、本年一月二十三日ついに第三回目の発病起り、クララ、スウェイン病院においていとも平安の裡に一生の幕を閉ぢられた。二月初めには帰米の予定であったが、それを永遠に中止し、一生をかけて最も愛したインドから天国へ帰られたのである。

あの慈愛に満ちた眼ざし、やや不明瞭になった発音、暖かい握手、三本指をかざして、『イエスは主なり』と唱和した時の御姿を再び見ることはできない。しかしアシュラム運動の中に師の精神は永久に生き続けることであろう。パウロと同様に『よき戦いを戦い、走るべき道程を果し、信仰を貫徹された』師の霊は、今や神のみもとにあって義の冠を授けられ、『善かつ忠なる僕よ』とのお言葉を受けておられるであろうことを信じる。

（三）聖霊の啓導と充満
（四）教会への奉仕と伝道
（五）神の国の体験と献身

最新刊

スタンレー述、海老沢訳
一日アシュラムの守り方（30円）
各個教会単位で開く時の参考書参加者一同に必読願いたい文書

アシュラムとは何か（30円）
地区アシュラムの手引（50円）
どちらも残部僅少
JUCAシリーズは、以下続刊

各地アシュラム報告

第七回関西アシュラム

昨年十一月シオンロッジにて

二二日朝から二三日夕まで、部分参加を含めて九五名、中路嶋雄、中島彰の両氏をリーダーとして開催、金元治、西条初栄、辻中昭一の諸師も奨励に立った。朝の断食はすばらしく、七分団の祈りの時も信徒がよく活躍された。連鎖祈禱も労働もよくできて力となった。

聖書は『ピリピ人への手紙』を中心に学び静聴した。充満の時には一同心から主の恵みに満されて感謝、会費の他賛助献金が八万余円捧げられ、連盟に協力できることを喜ぶ。

後宮俊夫師他十数名の実行委員のよい準備と進行に相和して参加者一同よく祈りをもって支えられ、恵多いアシュラムとなったことを感謝する。

混迷の続く教界にアシュラムを通してキリスト者の霊性を確立し、主のみからだの成長に仕えるものとなることを祈ってやまない。

第二回東北アシュラム

一月十五日一の関にて

『すべての教会に奉仕するコイノニヤ運動』を標語にして十五日午後から翌十六日正午まで一つの関の保養センターで開催した。村上束、大住三郎、その他八名の委員よく準備され、連盟から高瀬理事長をリーダーとして迎え、開心、立証、分ち合い、充満の時の指導を願い、聖書講義は瀬谷重治、桂島祐三の両師に願った。出席者は三十名で四十才以下五名、以上二五名であった。宣教師、カトリック司祭も参加され感謝、一同更にアシュラムの精神を理解し普及するため各教会で連盟から小冊子を取寄せた。第三回は今秋に秋田県で開く予定。参加者一同充満の時には全員が立って次々に恵を証し新しく与えられた決心を語り満たされ、また会う日を楽しみにして別れて行った。

第一回城北アシュラム

一月十六日東京池ノ上教会にて

山根（池ノ上）岡田（新宿西）海老沢（江古田）横山（西川口）の諸師が祈の結果、この聖会が開かれ、近隣教会十三からも参加者を迎え、五九名の予想以上の多数が恵みの時を持った。四十才以下十六名、以上四三名、平均年令四十九才、十六日朝十時開会礼拝、（山根）開心（岡田）四分団で更に開心の恵に与かり、午後は五原則につき山根師の講話、第二回の分団で分ち合いと祈りの時に入った。夜は立証の時で、成毛兄（池上）大橋兄（同）吉田姉（同）菊池姉（深谷）の何れも霊の導き溢れる立証に一同感銘を受け、祈をもって第一日を終る。十名ほどは会堂に宿泊、連鎖祈禱、十七日朝七時、早天祈禱会、静想の時（海老沢）御言の分ち合い（横山）午後聖書講話（海老沢）は詩五一篇、第三回の分団、いよいよ霊交と愛のもえ上るを覚え、充満の時（岡田）予定を三十分延期するほど恵みの分ち合いがあった。感謝、席上献金約三万は関東地区のために捧げた。

ミニ・アシュラムとして計画したが参加者から本格的アシュラムであったと感謝の言を述べられ準備委員一同も感謝に満された。

第七回四国アシュラム

一月二五日松山済美会館にて

宇都宮委員長他のよい準備のもと三五名の参加を得、大阪から来援された中路嶋雄師をリーダーにして二五日午後開会礼拝（桑原重夫）開心（伊藤栄一）夜は聖書講義（山村尚道）中路の時、晩禱（宇都宮）で就寝、二六日朝の静聴（唐渡弘）聖書講義（戸田義雄）中路の時あり、小団祈禱、午後に充満の時（岡隆正）閉会礼拝（宇都宮）というみっちりまとまったプログラムで少人数乍ら熱心な兄姉の協力により大変恵まれ一同大きい感謝をもって散会した。今秋米国から来援されるなら、百名位集めて三日間開きたいとの声がある。

ジョーンズ博士記念アシュラム

三月二十日淀橋教会にて

世界アシュラムのグル（首）スタンレー・ジョーンズ博士の永眠を追悼記念する集会が（アシュラム）の名によって、三月二十日（火）午後三時から東京の淀橋教会で開催された。

第一部追悼会、司会岡田実、追悼の言、中路嶋雄、他有志の立証。

第二部（五時）夕食、交わりの時。

第三部（六時半）立証会、司会横山義孝、立証、鈴木留蔵、大橋芳仁、メッセージ高瀬恒徳、報告、海老沢宣道、記念事業への協力計画発表などあり。

アシュラムの友が全国から参加され、出席一五〇名陪下を満し、恵み溢れた会合となった。

ジョーンズ博士記念事業

献金のお願い

博士を記念して目下米国連盟を中心に左記三種の事業計画が発表されているので、わが日本連盟はその一部を負担協力したいと考えています。

一、ガリラヤ湖畔のアシュラム・センター建設（三〇万ドル）

二、インドのサト・タル・センターに食堂増築、同じくクララ・スウェイン病院に手術室を増設（五万ドル）

三、低開発国のアシュラム促進費（二五万ドル）合計六〇万ドル

わが国としては少くとも一万ドル、（二七〇万円）を各自が半年毎でもよいから博士への感謝の心から捧げるようにお願いします。

募金委員長　鈴木留蔵